
しがつばか。熊原と佐鳥さん 2

dalmabowz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しがつばか。熊原と佐鳥さん2

【Nコード】

N1621R

【作者名】

d a l m a b o w z

【あらすじ】

再就職活動中のバイト男と、可愛い??? ストーカー再び登場。

「バイトかストーカーか、それが問題だ」

※「めりくり。熊原と佐鳥さん」の第2シーズンです。4月1日完結は無理でした。サーセンorz ネットゲームのネタは外せませんw

はるのおがわ（前書き）

「めりくり。熊原と佐鳥さん」の第2シーズンです。
前作もよろしくお願いします。

はるのおがわ

「先輩の子供ができました」

突然の告白に硬直した俺を、誰が笑えるだろう。

いつのまにか俺の背中に寄り添っていた相手は、屈んだ俺の耳元にささやく。

保護欲をそそる仔猫の様な調子で、花の蜜に似た息を漂わせながら。

俺は深夜のネットカフェの店内で、お客が帰ったブースを清掃していた。

漫画や雑誌が残っていないかざっと確認すると、テレビやテープル周りを殺菌剤をスプレーしたタオルで拭く。

床のゴミ箱をチェックしたら、お菓子の包みがあったのでゴミ袋に移す途中の告白だった。

後ろを見ずにゆっくりと深呼吸し、この衝撃発言への対応思考中の脳内では、懐かしい映画のBGMが流れ始めた。

それはあまりにも有名なサメが登場する映画の代表的音楽。

誰かさんにまるかじりされるイメージが湧いてきた俺は、曲がピークになる直前、頭を振ってその想像を散らす。

「何の話かな？ 佐鳥さん」

俺は何事も無かった態度で上体を起こすと、声の方へ向き直った。そんな俺の眼前には、カフェの可愛い制服を着たトラブルメイカ¹。

自分の肩を抱いて、わざとらしく腰をくねくねさせながら、再度

同じ台詞を繰り返す。

「だから、先輩の子供ができたんです」

俺に無実の罪を着せようとしているにもかかわらず、佐鳥さんは頬を染める。

夜だからって寝ぼけんな、このストーカーが。

だが、俺は怒鳴りたい気持ちを抑えて子供にする様に説明を試みる。

「佐鳥さん、小学校で習わなかったかな？ おしべとめしべの話？」

俺もそんな古い表現で習ったことなどないが、そっち系の話をこのストーカーとするのは心底嫌だったので、昔の世代の非常にあやふやな例えを持ち出してみた。

「先輩、いつの人ですか？植物と動物なんて比較するには遠すぎます。今はもっと具体的かつ実践的ですよ」

佐鳥さんは鼻を鳴らすように俺を小ばかにした。そのくせきらきらした瞳は、俺とそんな話をしたいと思ってるのが丸分かりだった。それは、「ねこじゃらしなんて、もう興味ないもん」な仕草なのに、視線だけはしっかり追いかける成長途中の仔猫みたいなもんだ。

結局この話を終わらせないと、離れてくれそうにないので、俺は諦めてはつきり言う。

「俺と佐鳥さんは、ただの友人だろ」

これでも「元同僚」じゃなく「友人」という表現で、充分譲歩したつもりの俺だった。

しかし佐鳥さんは不満げに細い両腕をクロスさせる。

「違いますっ」

舌をちろんと出しながらバツマークを強調した。

俺は心の中でため息をつく。

そうだな。違うな。本当はただのストーカーだよ。

「あんまり変な事言わないように」

バックヤードに戻って、返却口の食器を洗いながら告げる。

平日の深夜でしかも天気が悪いという事もあって、あまり客がない。

週末は花見客が流れてくるかもしれないけどな。

ストーカーと高確率でエンカウントするネットカフェ。

よりにもよってここで働いている理由は、もちろんある。



年末に会社が潰れて、俺はハロワに通ったが、不況もあって一年以上就職先が見つからなかった。

結局バイトをして日々をしのぎながら、就職活動するしかないという覚悟を決めた。

ちなみに「退職金」はまだ佐鳥さんの手中なので、俺の窮地は続

いている。

生活保護は最後の手段だ。働きたくないわけじゃないしな。

そんな時、寝床にしているネットカフェでバイト募集の店内掲示を見つけた。

店長が管理担当用というよくわからない理由で、バイト専用無料ブースを新設したのだ。

つまりバイト終了後も店長黙認で、ネットカフェにただで泊まれるワケだ。

会社勤めの時から漫画喫茶で寝起きしていた俺にとって、これは無視できない条件といえた。

もちろん本来そんな事は許されない。

だが、店長を上手に説得した交渉人がいた。見習いで入ったはずの佐鳥さんだ。

どんな話し合いがあったのかはわからないが、とにかく店長はそれを承諾したのだった。

しかも佐鳥さんからの紹介者を優先採用するという約束まで、取り付けていやがった。

正社員の仕事が見つからず、日銭のバイトを探す俺に、ここを紹介したのも、もちろん佐鳥さん。

説明の際、白魚のような指で俺の掌を包みながら喜びをあらわにする。

「先輩と一緒にバイトできるなんて、とっても幸せです」

「まだ決めてねえし。まあ、もし、俺がここで働いたら、今度は佐鳥さんが先輩だけだな」

「そういえばそうですね！」

「一時的とはいえまた一緒に職場は勘弁してほしいがな」

迷う俺の心にも無いおせじに、佐鳥さんは言われて気づいたらしい。

ふふふ、と微笑みながら偉そうに胸をそらす。

あこのラインのなめらかさは、リヤドロの陶器少女のようだ。

「再就職までの我慢か、でもやっぱ嫌だなあ」

俺は修行僧の悟りまでの葛藤を心中味わう。

「そっかあ。先輩ともなれば、命令し放題ですね」

佐鳥さんかというと、いつの間にかおかしな方向に話がそれていた。

お花畑でピクニック中の人間の顔前で、俺は手を振ってみる。

「おーい。戻ってこーい」

だが、脳内花畑でご禁制のケシの花を摘んでいる幸せなヤツは、どうやらすでに先の場面にすすんでいるらしい。

両手を頬に当てて、くすくす言いながらここにはいない俺に指示をだしている。

「くまはら。お姫様だっこでアパートまで送りなさい、なんてね。」

うわあうわあ」

妄想街道爆走中の旅人を現実に戻すため、俺は無言で後ろ頭を軽くはたく。

「あれ」と、夢から覚めた佐鳥さんには構わず、条件について確認した。

そして今度はハムレットの心境がわかった気になる。

「バイトかストーカーか、それが問題だ」

……条件は佐鳥さんと「完全に同時間」の勤務シフトにする事だった。

ストーカーが完全密着取材状態のネットカフェ。

天敵と遭遇率100%って、どんなインフェルノ級ダンジョンだよっ。



「とにかく、恋愛とかは無いから」

毎度の様にこっちは否定するにもかかわらず、佐鳥さんが懲りることはない。

俺が洗ったコップを布で拭いて並べていたが、この宣言に悲しそうな顔で袖にすがりつく。

「ええ!?!　じゃあ体だけの関係ってことですか」

おい、そんな話どっから湧いたんだよ!

佐鳥さんから腕を開放し、俺はスポンジを握りしめて、冷静になろうとまた深呼吸をする。

そして厨房にある業務用キッチンのくすみを取るべく、ゴシゴシ磨く。

まるでカタキの様に。

そうしながら俺は明確に訂正した。

「ちげーだろっ それを言うなら清い関係だろ！」

ちゅーりっぷ

「とにかく、変な話はこれで終わりな」

俺はシンク磨きがおわり、キッチン脇の棚にもたれて腕を組む。

佐鳥さんの妄想にこれ以上付き合っていられないので、しっかり釘をさすつもりだ。

「いいじゃないですか、今夜は二人つきりですし」

佐倉さんもガラスの乾拭きが済み、「ふいー」と奇妙な声を出しながら背伸びをする。

両手の指を組んだまま、腕をひねって前に伸ばす。そしてそのまま上に。

俺にはそんな様子が体育の準備体操を思い起こさせる。

その後佐鳥さんは、従業員の休憩室から折りたたみ椅子と自分のバッグを持ってくると、雑誌を取り出して読み始めた。

俺は、完全に休憩モードに突入した相手にため息をつく。

まあ、確かにヒマだし、少しはいいか。

少数のボックス客が辺りへでていない事を確認すると、俺は飲料ブースでコーヒーとミルク紅茶を入れる。

キッチンに戻ると、佐鳥さんへ片方を渡しかけた。

「先輩、なんのトラップですか？」

紅茶を見た佐鳥さんの返事を聞いて、ぐいっと手元にカップを戻

す。

毎度の事ながら脱力感を味あわせてくれるな、おい。

「ただの紅茶だ。嫌なら飲むな」

「先輩になら、媚薬入りでもかまいませんけど」

佐鳥さんのわざとらしい流し目を無視するぐらいは、俺にも簡単だった。

今度は押付けるように暖かい器を渡し、俺は自分のコーヒーを一口含む。

「もっと忙しければ、こんなくだらん会話もしなくていいんだけどな」

がらんとした店内を見ながら俺はぼやいた。

たがネットカフェは客がボックスにいる方が多いから、ガヤガヤする事は少ないけどな。

飯もこんな時間の注文は少ないし。

「バイトが少なければ、一緒だと思いますよ」

俺の心中を見透かしたように、英語の論文雑誌を読みながら佐鳥さんがつぶやく。

そうだな。他の話でストーカーの興味を引いてくれる他人が、切実に欲しいもんだぜ。

そんな俺の願いを知りもせず、国際的にも評価の高い「自然」な書名のページを、桜の花びらの爪を持つ指がめくる。

実際日曜深夜は客も少ないが、学生バイト達の多いこの店では、不人気な勤務時間帯だった。

ここに住み込み状態の俺は、昼はハローワークに通っていたので、逆に夜勤務が望ましかったけどな。

ひつつき虫は、自動的に俺と同じシフトになる。

虫の名前は只今ストーカー虫って感じだな。

もちろん、二名では回せないのも、今夜も本来は店長とあと一人の四人体制だ。

ところが店長はインフルエンザ、残りは花粉症アレルギーで急遽ダウン。

「もし忙しければ、先輩を完璧にフォローしますので、安心してください」

俺と絡む気満々の佐鳥さんの返事を聞いて、こっちはさらに落ち込んだ。



「先輩、先輩。この論文面白いですよ」

穏やかな気分で一服しようと、出来る限り意識の外に置いていた対象が、突然目の前に英文字の塊を押付けた。

「難しい英語なんてわかんねーよ」

名前しか知らない学術系雑誌の専門用語に、あっさりと万歳の俺。

今年1月発行のちよつと古い号だという事だけは、表紙の数字でわかったが。

「なんとかなるのはネットゲ会話ぐらいだ」と苦笑しながら本を返す。

昔の俺は、ほんのガキの頃から長い間廃ゲーマーだった。ハマリぶりは今の佐鳥さんと並ぶぐらいだろう。

現在殲滅皇女の暴れまわる世界が、海外サーバしかなかった昔、結構レイドをこなした。

もちろん日本語仕様などなく、日本人プレーヤ同士でローマ字会話中、下手するとPKされた時代の事だ。

イベントや調整もアンバランスで、偏ったアイテムが実験的にドロップしたもんだ。

そういやレアモンスターの沸き待ちしてる内に深夜になって「もう落ちる」と言ったら、海外組に「こんな迷宮の最深部で俺達を見捨てるのか」と泣かれたなあ。

「時差あるんだからそっちは良くても俺は徹夜だ」と説明したが、結局モンスター倒した時には朝日が昇っていたもんだ。

俺は、その当時のハマリぶりを思い出し、少し懐かしくなる。

一方俺を嬉しそうに見上げながら、佐鳥さんは奇怪な台詞を吐き出してくれる。

「ふふ、私がいないと先輩は何もできなんですから。読みましょうか?」

おい、見当違いな場面で世話女房ちっくな事いうな。

普通のヤツはこんな専門誌読まねーし。

俺はどうでもいいとばかりに首を振った。

「そういえば、あの時の約束まだ実行してもらってません」

不意に佐鳥さんが俺を見上げる。

約束？　なんだなんだ？

佐鳥さん相手に下手な事を言えば、窮地に陥る経験を積み重ねたので、俺は首をかしげてとぼけた。

「ここにバイト採用されたら、お礼に一緒にネットゲしてくれるって言ったじゃないですかっ」

佐鳥さんは紅茶を持つ手をこぼれそうな程あげて主張する。

俺は頭の中で自分を殴りつけながら、なんとかうやむやにしようと試みた。

「それは先月無理やりアパートに呼ばれて、クリアした話だろ？」

「駄目ですよー。先輩ってばログインしただけで、キャラを部屋から動かさないし。」

結局部屋で酒飲んで、朝まで爆睡してただけなんですから」

……くそ。ネットゲネタが佐鳥さんのスイッチなのは承知していたはずなのに。

「一応、ペアでパーティも組んだわけだしさ」

佐鳥さんは俺の必死の抵抗を物ともせず、さらりと付け加えてきやがった。

「あのロマネコンティは結構お高かったんですけど」

ぐっ。俺は、過去の自分の意地汚さに地団駄を踏む。

確かにあのワインは美味かった。前の会社の飲み会で、俺がワイン好きな事を知った佐鳥さんは、俺との交渉でたまにこの手を使う。俺も自腹ではとても買えないビンテージ物を見せられると、分かっているながら断れないのだった。

「そういえば、契約不履行はビジネスパーソンとして失格と指導頂きました。どこかの先輩に」

ぐぐっ。痛い所をつきやがって。

ブラック企業が生き残るには、納期厳守は絶対条件だった。そこで契約の重要性をまず徹底的に教育したのだ。

「約束破るやつは社会人のクズだ」と大げさに語った事が、こんな所で裏目にでるとは。

俺も己をクズ認定はしたくないから、今更取り消したくはねえ。

「ログイン即寝オチは、詐欺行為には当たらないんでしょうか？」

ぐぬぬぬ。この悪魔^{メフィスト}めえ。

俺は、佐鳥さんのニヤニヤとした笑いに耐えられず、降参する様に小さく叫んだ。

「わかったっ でも一回だけだぞっ」

もりのくまさん

俺は夢を見ていた。

見ている事を認識できるって事は、俗に言う明晰夢らしい。

その中の俺は、森の中に立っていた。

辺りを見回すと深い森だ。植生は針葉樹中心に思える。

傾斜のほとんど無い土地に、太い樹木が文字通り林立していた。

そして背の低い広葉樹は、高い針葉樹の枝を抜けた日当たりのマシな場所に育っている。

もちろん下草は何処にでも生えてるしな。

ただこの鬱蒼とした景色からは、森の奥の様子さえわからなかった。

針葉樹と断言出来ないのは、檜っぽい木々の葉と樹皮の色が違うからだ。

緑というよりも全体的に紫色に近い。しかも檜とは違う香りがする。

他の木々もどこか日本とは違う。

ただ人工林に特徴的な枝打ち管理は見られないから、少なくとも俺の周りには自然林だろう。

視線を下げると、俺の足元には切り倒された丸太が何本か並んでいる。

鉋が置いてあるので、荒く枝を落としていた途中らしい。

そして俺は斧を持っていた。そう、斧。

薄手の皮のズボンに荒い布のチュニックを身に着けて。

格好からすると、きこりだな。

この時点で、ようやく俺はこの夢がネトゲをベースにしていると理解した。

「ああ、昨日あの後ログインして酷い目にあったもんなあ」

「何ぶつぶつ言ってるんですか？」

後ろでからふいにきれいな声が聞こえ、俺は飛び上がった。
恐る恐る振り向くと……まあ、そんなわけだ。

「……やっぱ悪夢なんだな」

ついに、俺の夢にまで背後から忍び寄るストーカー。

「夢よ覚めよ！」

俺はそう叫ぶと両手で全身をバンバン叩く。

それで駄目ならと、紫の幹に突進しガンガン頭突きをかます。
とにかく覚醒するために、ひたすら駆けずり回った。

……結果は空しいものだったが。

「はっ、はっ、さ、佐鳥さんまで、なんでいるんだよ」

息切れするまで努力したのに、どうしても起きられないことにいらつく。

そして夢にまで侵入した相手に、俺は八つ当たり気味に文句を言った。

俺の奇行にあっけにと取られていた佐鳥さんは、かくんと首を傾げる。

まるで公園の白い鳩の様に。

両手で持った体格に似合わぬ大きさのバスケットが重いのだろう。その動きで多少身体もふらふらした。

「えっと、サトリって誰ですか？」

だが佐鳥さんの返答は、俺の予測と違っていた。

え？ 間違いか？

だけどそのアバターは佐鳥さんが作成したキャラそっくりなんだけど。

確かに最初の時と服は違うようだから、まさか偶然か？

「えーとすいません。人違いかも。あなたの名前を教えてくださいませんか？」

俺は頭を下げると、相手の名前を確認した。

「プワソン・ダヴリルですよ、冗談言ってるんですか？」

柘榴石の瞳をぱちくりとした赤毛の少女。

髪が中心が薄めで、毛先にいくほど濃い。

まるで秋の紅葉を彷彿とさせる魅力的な色合いだった。

俺がまじまじと見ているので気まずいのか、少女は背中^{はね}の透き通った対の翅^{はね}を、空中でひとはたきする。

俺と顔の高さは同じだが、それは浮いているからだ。

少女の身長は、頭の先からつま先まで入れて、ボールペン二本分程度だった。

俺はなんともいえない気分で考え続ける。

佐鳥さんのアバターネームそのまま。種族も同じ妖精族。

まあ、夢が覚めるまではしょうがねえ。明晰夢ならそのうち覚めるだろう。

俺が黙っていると、プワソンと名乗る少女が口を開いた。

「変な事言っていないで、お昼にしましょう、グリズリーさん」

「グリズリー？」

「そうですよ？　ほんとにどうしたんですか？」

少女はバスケットを草むらに置くと、心配そうに顔を寄せて、俺をのぞきこむ。

そんな妖精族の人形めいた精緻な美貌を見ながら、俺はがつくりとしていた。

そういや、名前適当につけたもんなあ。

グリズリー・クマクマ。

名のグリズリーは灰色熊の事だし、苗字は熊熊。

まあ、あのアパートでワイン飲みながら考えていた時は、二度と

ログインする気は無かったから、正直名前なんてどうでも良かったし。

でも今呼ばれると少し落ち込む。

も少しカッコイイ名前にしておけば良かったなあ。

「はい。リクの実ですよ。貴方の種族が食べていると、少しずつ力が強くなると聞いて、森の木から分けてもらいました」

ランチの籠から取り出した大豆程の木の实。

俺はプワソンから手渡された毒々しい色の木の实をもてあそびながら、このアイテムの知識を呼び起こす。

確か、筋力値のステータスをほんの少しだけ上げる。

但しランダムなので、上がらない事もあるってヤツのはずだ。どこの竜王討伐ゲームだよ。

しかも特定種族のみ有効。俺の選んだ種族にだ。

そんでもって俺が選んだのは……ゴブリン。

緑に少し茶色が混ざった皮膚に、枯葉色のボサボサ髪。どう見ても極悪人の面構え。

「こんな事ならエルフ選んどけば良かった」



バイト先を紹介してもらってから一月後。

ストーカーを除けばいい職場だったので、お礼と指定された条件を実行しに佐鳥さんの部屋に来ていた時の事だ。

「まあ一回だけの事だ」と思い、嫌々ながら壁際のソファに座って、キャラメイキングを適当にしていたのだが、そこに佐鳥さんの横槍が入った。

「ハイエルフとか選んでくださいよっ」

佐鳥さんは俺に美形のアバターを作って欲しかったみたいだ。

いつもの様に、廃ゲーマーは部屋の真ん中にあるガラステーブル前に陣取っている。

そして50インチの大画面で自分のキャラメイキングをしながら、ちらちらと俺のノートPCをのぞいてくるのだ。

もちろん俺が操作するこの薄型PCは、佐鳥さんからの借り物だ。

無線ネットワーク繋がれているため、佐鳥さんの大画面液晶にも、俺のメイキング画面をマルチで表示している。

「隣に座って遊びましょう」と始める前に誘われたが「慎まず」お断り申し上げたら、こんな風にしゃがった。

隣同士とか勘弁しろ。恋人同士じゃねえっての。

「やだね。どうせゲーム内種族比率で5本の指だろ。俺はそんなの興味ねえ」

「せめて、ヒューマンで」

佐鳥さんが再度要望してくる。

でも昔、俺が使ったアバターの内、メインは人間族だったので、

同じタイプには興味がなかった。

例え今回だけでも、どうせなら楽しく遊びたいしな。

あえて昔の自分が一番選択しない種族にしてやるぜっ。

「ネットゲ付き合う条件を承諾する際言っただろ。新しいアカウントで一からアバター作る。互いの種族に文句言わないって」

このオンラインゲームは基本無料で、複数アカウントもOKなので気楽なものだ。

佐鳥さんは以前から、引退後も未練がましく残してある、俺のメインキャラを見たがったが、断固拒否していた。

もし当時のギルド員がログインしてて見つかったら、なんか恥ずかしいだろ。

不満そうなので「そっちは皇女使えばいいよ」と言ったのだが、佐鳥さんは「私も先輩と最初から遊びます」と一緒に新アカでメイキングを始めたのだ。

「でもでも、いきなりこんな魅力値最低の種族を選ばなくてもー」

佐鳥さんは、「デートする時にちょっと」と、俺から見てもおかしいぐらいにがっかりしている。

まあ、そっちが可愛い妖精族を選択してるのは、大画面見ればわかってたけどな。

こちらを悲しそうに振り返る顔を眺めながら、今回のゲームはお

礼という事を思い出した義理堅い俺。

それでも種族選択を譲る気はなかったが、少しだけ佐鳥さんの要望を聞く事にした。

「わかったよ。なるべくマシな見かけにするから、希望があれば言うてみな」

そう言ってウィングラスを片手に、佐鳥さんの願いどおりいじったパラメータだったが、所詮限界はある。

出来上がったアバターは、短躯のゴブリンを無理やり引き伸ばした感じといえはいいだろうか。

人間族のデフォルトより少しひよろ長いガリガリ体形で、緑茶とほうじ茶の中間の肌。

顔はポジティブに考えても、ブサメンってのが精一杯だった。

俺はアバターが出来上がる頃には酒を相当飲んでしまい、最後は後ろのソファで朝まで泥酔していたので、その後の事はあまり覚えていなかったが。

それでも眠りに落ちる寸前「まあ、愛があればいいか」などつぶやく、ストーカーのたわ言だけは聞こえた。

ちようちょ

森の中で丸太に座りながら、俺はバスケットの昼飯を食べる。麦芽パンみたいなモサモサした舌触り。飲み込むのがつらい。

夢でも腹が減るのは、俺が普段から食い意地が張っているからか？ 深層心理までそれってのは、なんかなあ……

急に喉が詰まって胸を軽く叩いていると、妖精の少女が皮袋の水筒を渡してくれた。

たっぷり入っているのがわかる。

俺は、大きめのマヨネーズ型容器についた木栓を抜く。

左手で皮袋の側面を挟み込んで押しながら、中の液体を吸い上げた。

少し甘い。例えるなら水に蜜を混ぜた味だ。

口内の残ったパンを、その飲み物でかみながらふやかし、柔らかくなった頃に飲み込む。

こんどは喉に引っかからず、胃のあたりまで落ちていった。

「ありがとう」

俺は、お礼を言って皮袋を返す。

小さい身体の少女は、微笑んでその水筒を抱きかかえた。

「おい、大丈夫か？」

自分の背丈に近いモノを、浮かんだだまま持っている。

さっきは焦って気にする余裕も無かったが、冷静に考えると落すんじゃないか？

だが、そんな俺の心配は杞憂だった。

「妖精族は握力が強いんですよ。あと、体重の何倍もの荷物を持つて飛べますし」

それを聞いて、俺は妖精族の職業の一つに、郵便・宅配業務があった事を思い出す。

確かに昼飯のバスケットも、彼女が1ダースは入りそうな大きさだしな。

佐鳥さんのアバターを持つ少女は、目の前を浮遊しながら、俺が食べる様子をにこにこと見ている。

彼女の服装からすると、初夏あたりか。

残念ながら森の奥には風も吹かないが、特に暑くは無かった。

今はちょうどお昼時らしく、日光も真上から差してくる。

軽やかに浮かぶ少女の翅が、その光を三稜鏡プリズムの様に反射して七色の影を描く。

俺は、夢ならではの美しい光景に目を奪われていたが、噛みかけのパンに意識をもどした。

「プ、プワソンさんは食べないの？」

俺だけが食べる事にも気が引けるしさ。

「大丈夫です。食べてきましたから。グリズリーさんこそもつと食べて下さいね」

赤い髪の少女は気さくに手を振って返事をしてくれた。

俺は、このアバターが佐鳥さんの作成したモノだと思っているが、中の人の性格はどうも違う様だ。

まあ、俺の夢なんだから「中の人なんていない」のかも知れないがな。

とりあえず、話をあわせる事にして、早く目が覚めるのを待とう。

「食べてきたって事は、近くにプワソンさん家があるんだね」

「グリズリーさんの家でもあるでしょ。一緒に作ったじゃないですか」

その言葉触発されたのか、昨日2回目のログインをした直後の一件を思い出す。

げんげんな表情の相手には、あいまいにうなずいてごまかす。

そのガーネットの瞳を見ていると、佐鳥さんの得意げな声が、頭の中に聞こえてきた。



「苦勞したんですよ。この森へ来るまで」

バイト終了後、いつもなら管理用ブースで熟睡するはずが、言い負けた俺。

何故かまた佐鳥さんの部屋にきて、ネットゲをする羽目になった。

バイト明けの早朝だが、まだ俺に眠気はやってこない。

その理由は、佐鳥さんがシャワーを浴びる前にテーブルの上に置いた、ビンテージの赤のせいだ。

俺は親のカタキの様にそれを睨みつけると、芳醇な味わいを想像して、無意識に出てくる唾を飲み込む。

内心の葛藤は佐鳥さんがバスルームから出て、髪をドライヤーで乾かすまで続いた。

そして俺はついに全身全霊の努力で、コルクを抜かずにそのワインを元の場所に戻させたのだ。

ふっ。俺だって成長してるってとこをみせないとな。

そして欲望に打ち勝った高揚感のまま、1ヶ月ぶりにログインしたら、キャラクターが街中の宿屋ではなく、森の小屋に出現した事に驚いた。

アバター作成後、俺達が最初に選んだ場所は、全ての種族に中立な街だったはずだ。

その場合、その街の宿屋の一室に出現する事になるのだ。

一月前、俺もたいがい酔っ払っていたが、なんとかその辺りまでは覚えてる。

「なんでこんな北方山脈の麓の森にいるんだよ」

俺が尋ねると、佐鳥さんは嬉しそうに説明しだした。

今夜のパジャマは、ひよこじゃなくて体中でカエルだった。

後ろのフードには飛び出し気味の目玉と大きな口。

かぶりものタイプらしい。佐鳥さんはカエルの顔を横に引っ張って頭から被る。

「似合ってます？　可愛いです？」

今日はテーブル用の椅子へ座り、ノートをいじる俺。

そのすぐ横で、絨毯にぺたりと腰を下ろしたまま、俺を見上げて尋ねる佐鳥さん。

半分以上顔が隠れて、ぎょろりとしたカエルの目玉は妙な迫力があつた。

「ああ」

なんだ、この悪趣味さ。

それでも佐鳥さんが無垢な子供だったら可愛いかな。

もちろんおれはそんな事はこれぼっちも言わず、適当に流すと「だからなんでこんな場所にいるんだよ」と話を戻した。

「先輩のゴブリんは、いわゆるやっちゃった系キャラですよね？」

カエルが説明を始めた。

「そうだな」

受け狙い系ともいう。

だけどそりゃ佐鳥さんが無理やり人間族に似せようとするからだろ。

あとゴブリンのアクセントが変だぞ？

「なので、やたらと街でPKされるんですよ」

PK。プレイヤーへ殺傷行為またはその行為者。

でもまあ、相手もこれがメインのアバターとは思わねえよなあ。
ゴブリンという時点でPK上等と取られてもしょうがない。

なにしろゴブリンという種族は、魅力値が最低、というかマイナス。
だからこのネットゲでは通常発生する街中の殺傷行為者へのペナル

ティが無い。

街のNPC警備兵も見てみぬふりって事だ。

つまり。他のプレイヤーにとって、ゴブリンを選んだプレイヤー
へはPKし放題。

……なんでこんな仕様が未だに残ってるのか、本当に不思議だが。

「そもそも、俺のキャラを勝手に宿屋から出さなきゃ……ああそう
か」

俺は佐鳥さんに文句を言いかけ、すぐに理解した。

最初のビギナー宿屋は現実の時間で一時間立つと、自動的に街の
中央にある噴水公園へ強制転送されるのだ。

「まあ、街出るまでにふざけて3回PKされましたよ」

L V 1ならワンキルだろ。よく3回で済んだな。

俺は対人戦闘上等のネットゲにしては、そんな回数で済んだのは幸
運だと思った。

「てか、さっさとログアウトしてよかったのに」

俺が投げやりにそう言うと、佐鳥さんはとんでもないとばかりに首をふる。

かぶったカエルの顔もぶんぶんと回って、なんか気味が悪いんだが。

「嫌ですよっ。初めてネットで先輩とデート！なんですから」

頬を両手ではさんで照れる仕草の佐鳥さんに、俺は醒めた視線を注ぐ。

「だからとてもショックでしたよ。初デートで先輩が奇声を発して血まみれになる度」

なんか、カエルの姿で言われてもなあ。

あと、「ぐぎゃ」とか「げぼっ」とか、俺がダメージ食らった時のアクションを真似んでいいから。

まあ、俺という中の人は、その時すでに酒に酔って撃沈してたけどな。

そんな俺の生温かい雰囲気にはこれぼっちも気づかず、小さくガツポーズをする。

「もちろん、PKの名前は覚えて、あとから殲滅皇女で懇切丁寧に
お礼参りをしてやりましたけど」

……そいつら引退してなきゃいいけどな。

かえるのうた

俺は佐鳥さんに向かってぼやいた。

「そこまでしなくていいじゃね」

そんな俺の回答が気に入らなかったのか、俺が座る椅子にじり寄って佐鳥さんが抗議する。

ずりずりと絨毯の上をほく前進する姿は、素人の俺が見てもなかなか堂に入っていた。

リアルでサバゲーでもやってんのか？

「だって、大切なデートに乱入されたんですよ？ ウキウキ&繊細な心は傷だらけになりましたよ？」

「それで、俺のアバターはPKされる度、霊安室に戻ってたのか？」

「ビギナー用の身代わり人形を持ってたので、とりあえず其れで街の外まで逃げて、そこから私の魔法でランダムテレポです」

佐鳥さんの説明を理解して俺は、まあ、そんなもんかとうなずく。

このネトゲは死亡すると、教会の霊安室に転送される。

そこで種族によって復活の方法が違うのだが、まあ、とにかく生き返るわけだ。

ただ、PVPが基本のこのゲームでは死亡頻度が高い。

それによる経験値損失は低い方だが、それでも回数を重ねるとキ

ツイし、なにしろロストを気にしては、満足な対人戦闘が出来ない。

それで、基本無料のこのゲームでは、本人の身代わりになる人形型が有料アイテムとして販売されている。

これを持っていると、1個につき死亡時1回分の経験値損失が無いのだ。

敵におそわれたプレイヤーは、死亡する直前人形が光る。そしてウインドウで教会への強制帰還か、その場での戦闘継続かを選ぶわけだ。

ただどちらにしても残ったHPは1なので、仲間かPOTで回復してもらい必要がある。

またこの人形は予備は倉庫保管しか出来ないなので、戦場に残った場合、次の死亡は経験値損失を意味した。

そして今回の俺の様な初心者キャラにもそのアイテムがプレゼントされる。

そうでないと廃ユーザーの猛者共に遊び半分で狩られてしまうだろう。

しかも初心者用人形は10回まで経験値損失を無効化する。

ただしLV15で消えてしまうし、売買も出来ないという制限はあった。

佐鳥さんはこの人形を使って街の外へ行き、後は魔法テレポート可能な街の外に出て、一気に逃亡したというわけだ。

「だけど、私もLV1だったんで、行き先を決めるスキルが無くて。魔力切れを何回も有料POTで補って、やっと北壁の森までたどり

ついたんですよ」

膝元にきて俺に寄りかかるカエルを、やれやれという態度で見下ろしかけ……俺はさりげなくノートパソコンに視線を戻した。

コイツの被り物パジャマ、ぶかぶか過ぎっ！

カエルのフードに隠れた佐鳥さんの頭を押さえつけると「何するんですかあ」とヒレ付きの両手で抵抗するので、俺は「なんか羽織れ」と命じた。

俺の言葉を聞いた佐鳥さんは力を抜くと、下を向いて黙った。しばらくすると「ふふふふふ」と綺麗な声で笑い出す。

おい、気持ち悪いぞ。

「先、輩」

あげくに生キャラメルが舌先で蕩ける様な口調で、俺を呼びやがった。

俺は椅子に掛けた自分のライトグレーの春コートを手にする。

「これでも着てろ」

「照れ屋さんなんだから」

俺はそれ以上言わず、佐鳥さんに、スプリングコートを思い切り押付ける。

くしゃくしゃの布が顔に当たったのか、「ふがっ」と声を上げてひっくり変えった馬鹿ガエル。

俺がそれ以上このネタに乗らない事がわかったらしく、佐鳥さんは座ったまま、渋々コートに両袖を通す。

大きめのパジャマの上からでも余裕のサイズだった。

「ボタンをはめろ」

続けてそう指示する俺を無視して、長い袖から緑の指の先だけを出して驚いていた。

「先輩の身体ってやっぱり大きいですよねえ」

そう言いながらコートの襟を持ち、クンクンと仔猫の様に鼻をひくつかせる。

「先輩の匂いです。幸せでのぼせそうです」

「脱げ」

この匂いフェチのストーカーが。

俺はすぐに佐鳥さんからコートを剥ぎ取ろうと、屈んで手を伸ばした。

すると、今までのゆったり感が嘘のような敏捷さで、カエルは部屋反対側へ遁走した。

マジでぴよんぴよん跳ねて逃げやがった。

「先輩に襲われるっ」

立ち上がって近くまでいった俺に、佐鳥さんは言葉と裏腹に楽しげな表情で、さも恐ろしそうに怯えたフリをする。

それを見ていた俺は、心底どうでも良くなったので「クンクン禁止だ」と告げて椅子まで戻った。

「その後はどうしたんだ？」

俺が質問を再開すると、ヤバイモノでも吸ったように、楽園に漂う仕草のカエルは、コートの両袖で顔の下半分を覆い、これ見よがしにまたクンクンさせていた。

「もういいから」という俺の脱力感あふれる突っ込みにもかかわらず、しばらくヘブン状態の佐鳥さん。

やっと満足したのか答えてくれるが、その際「じゃあまた後でクンクンします」と付け加えるのは忘れなかった。

「この森はめばしいアイテムも採集できないので、プレイヤーもめったに来ません。二人で愛の巣を作るにはうってつけかと思いましたが、家を建ててました」

何が愛の巣だ、余計な事すんな。

前回佐鳥さんのパソコンでアカウント取った時点で、勝手に操作される事は予想済みだった。

でも1回きりなので、あとは野となれ山となれな気分だったことも確かだ。

しかし、目の前で好き勝手される様子を見せられると、アバターとはいえ、俺の分身がストーリーカーに操られるのは絶対嫌だった。

どんどん酷くなってきた状況説明に、両手の指で顔の側面をもみ

ながら、俺は聞きたくない質問をする。

「これ以上、俺のアバター使って勝手してないだろうな？」

すると佐鳥さんは、これ以上無いような幸福感に満ちた微笑ととも
にささやく。

「えへへ。あと一つだけ……」

その答えを聞いた俺は、自らのこめかみがビキンと音を立てた気がした。

おはながわらった

「瀕死のグリズリーさんを連れて、必死で転移魔法を唱え続けました」

プワソンの悲しそうな顔を見ながら、俺はどう答えようかと迷っていた。

彼女は、中立の街で荒くれ者に襲われ、俺が死に掛けた事や街から逃げ出した後、どんな風にここにたどり着いたかを語る。

「手持ちに魔力液の壺が結構あって良かったです」

赤い髪の毛先がかかる眉は、その時の恐怖を思い出したのか、ハの字にたれ下がっている。

緊張のためか身体もこわばり、今にも目じりから涙がこぼれそうだった。

泣きそうな女の子を前に冷たい事を言うのは、夢とはいえ俺の本意ではない。

佐鳥さんとは中の人も違うみたいだな。

だから俺は、あくまでこの世界の住人としての演技を続けることに決めた。

そして、ごめんごめんと頭を下げる。

「思い出したよ。死にかけだったから、はつきりしないけど」

俺は佐鳥さんとの会話を思い出し、バサつく髪をかきながら相槌

を打つ。

小妖精は安心した様に息を細くついた。
肩も下がり、少しはリラックスしたようだ。

「まさか、またアム熱に罹ったのかと心配しましたよ」

「ああ、俺自身もそうじゃないかと内心ビビった」

無理に笑って麦芽パンを口に入れる。次に話すまで少しでも考える時間を稼ぐためだ。

アム熱……アムネジア・フィーバー。突発性記憶喪失症候群。
このネットゲームの世界の全種族に、まれに見られる病気だった。

ある日を境に、自分の記憶が無くなってしまう。
その症状は様々で、全てを忘却する者もいれば、野菜の名前だけという場合もある。

俺は、プレイヤーが選んだアバターの共通症例を思い出す。
それは、名前や種族などの記憶や少しばかりの一般知識は残っているが、ビギナー宿屋に運び込まれる以前のほとんどの記憶が無くなった状態のはずだ。

もちろんアバター本人のルーツや交友関係の思い出は、完全喪失という症状を与えられていた。
つまり俺達プレイヤーは、個人の記憶を無くした種族に、いわば憑依した形になる。

「プワソンさんも、アム熱経験者だったよね？」

ぼそぼそした食感に辟易しながら、最後のパンを飲み込んだ俺は、カゴから果物を取り出そうとしている妖精に尋ねる。

正直答えはわかっていたが、それでも確認したかったのだ。

「はい。宿屋の人の話ですと、二人一緒にふらふらと入口から入って来て、そのままホールで気を失ったそうです」

俺は低めの鼻に指を当ててその状況を想像した。

初心者のアバターは、ぱっとその場に出現するんじゃなく、歩いて宿屋に来るのか？

その辺は俺の夢補正ってやつかな。

俺が考え込んでいる事を、記憶喪失の件で悩んでいると誤解したのかもしれない。

プワソンはキウイそっくりの果実を抱かえてふよふよと飛んでくると、歪な俺の三角耳を小さな手の平でなでる。

「大丈夫です。私も同じですから」

「そうだな、ありがとう」

ゴブリンではちょっとだけイケメンで、人間族なら残念すぎる程の不細工な顔で、俺が笑う。

すると、妖精族の中でも抜きん出た美貌だろうプワソンも微笑む。

なんだかくすぐったいその感覚について、俺は耳にあたる果実皮の細毛のせいだと思うことにした。



俺は、ランチ後の仕事を切り上げて家に帰ろうと、道具を片付け始めた。

夢はいつかは覚めるが、出来る限り状況の把握をしておこうと思ったのだ。

この辺、廃ゲーマーだった悪癖が抜けてないよな。

知らない世界を知りたい。突き詰めればそんだけの話なんだけどさ。

まあ、俺のコメカミを怒りで硬直させた件が、夢ならどうなるかも確認したいしな。

ただし今の俺は帰り道もわからないので、妖精に先導を頼もうと思ったが、また記憶を無くしたのかと不安にさせたくはない。

どうしようかと困っている俺に、少女が端にまとめてあった縄の束を持ってきてくれた。

「いつも家まで丸太を引っ張ってるのはこれでしょう？」

伐採した木を、俺は帰りに引きずって我が家まで運んでいるらしい。

言われるまま丸太の片方をしっかり縄で縛って、外れない事を確認していると、その縄の先を持ってプワソンが空中を進みだした。

「今日は一緒に帰るからお手伝い出来ます」

そう言う嬉しそうに引っ張る。

ピンと張った縄も丸太を動かす事はないけれど、その気遣いが嬉しい。

身体に比べれば力がある妖精族でも、人間の少女ぐらいが限界だけだな。

俺は種族設定を想起しながら、妖精の進もうとする方向を見る。するとその辺りの下草が押しつぶされ、獣道ほどの筋が続いている事に気づいた。

どうやら、何度も丸太を引きずった跡らしい。

これを辿っていけば、プワソンに怪しまれずに家まで帰り着きそうだ。

「よし、帰るか」

「はい」

俺とプワソンは、連れ立って家路へと向かう。

肩で背負った縄の束を引っ張った俺は、長い丸太で地面の下草を左右に分け、溝を掘りながら前進する。

たまに木々の間からのぞく山脈は、万年雪を頂いており、きっと冬は豪雪地帯なのだろう。

こんな丸太を運びながらも、紫の檜の間を散歩するように歩ける。どうも俺の腕力は、通常のゴ布林よりステータスが上がっている様だ。

リクの実を食べた効果かもな。すげえ渋かったけど。ちなみにキウイもどきはチーズ味だった。

「聞いてもいいかな？」

のんびり前方を飛ぶプワソンに、俺は尋ねた。

「なんですか？」

彼女は、縄を持ったまま、回りの景色を楽しそうに眺めている。
俺にはただの森だが、精霊と仲のいい妖精族には、きっと違う景色なんだろうな。

「どうして、俺みたいなゴブリンと一緒にいるの？」

プレイヤーに憑依されていないアバターは、NPCと同じ擬似的な知性を設定されているはずだ。

このネットゲのAIは結構馬鹿に出来ない。

俺は、この質問にどんな風に答えるのか興味があった。

ま、どうせ夢なんだけどな。

「二人とも同時にアム熱に罹ったなら、それ以前の記憶なんてないだろう？」

前を向いて縄をポトリと落とした妖精は、口をつぐんで立ち止まる。

空に浮遊したまま、俺の方を振り返りもしない。

俺は「NPCには答えられない質問をしてしまったか」と、残念に思いながら丸太を引きずり彼女の横までやって来た。
そしてワソンを見てびっくりする。

小さな妖精の顔は、髪にも負けないほど真っ赤になっていたのだ。

「え、え、えーと。気づいていると思ったんですけど」

プワソンは頬を染めてもじもじと手を捻くりだした。
どっかの誰かさんの仕草にそっくりだ。

嫌な予感がするぜ。

「わ、私もグリズリーさんの事は全然知らないんですけど、宿屋で
気が付いたらペア組んでたし、あとこれを二人ともはめてたんで」

おずおずと差し出した右の手首にはミスリル銀の細い腕輪。

慌てて俺が自分の腕をまさぐると、チュニツクの袖に隠れた二の
腕に、同じ意匠の腕輪があった。

「その、これは婚姻の証ですし。私達は記憶を失う前、夫婦だった
んじゃないかと」

照れた表情が、抱きしめたいぐらいに可愛い妖精。

その素直な感情にまぶしさを感じながらも、俺は中途半端な笑顔を返すしかなかった。

あの粘着ストーカー、なんて事しやがる。

このネットゲはログイン前に有料アイテムを購入するよう設定変更
ができる。

その場合アイテム購入画面と装備変更画面を終了後、世界へのロ
グインに進む。

ペナルティ覚悟で出現直後にPKしてくるヤツもいるので、必ず
しも街でのログアウトが安全とは言えないしな。

城攻めなどの集団戦闘の結果、遺恨が残れば敵対ギルドも増える
ので、その辺は気を使ったものだった。

佐鳥さんはそれを悪用しやがった。

有料アイテムの《エンゲージ・バングル》を二人のアバターに装備後、フィールドへログインしたのだ。

くっそ、泥酔してたから、装備やアイテムをいじられているなんて気づきもなかったぜ。

……いや、俺は知っていたはずだ。そうでなければ、明晰夢に出てくる事がないしな。

眠っていても音は聞こえているって良く聞くから、佐鳥さんの独り言でも聞いていたのか？

あのドリーマーなら一晩中一人でしゃべってても不思議じゃない。

「このバングルで先輩と永遠に結ばれます。えへへへ」

ストーカーのふざけた笑い顔をつい想像してしまった俺は、死ぬほど後悔した。

かっこう

一匹のゴブリンと一羽の妖精が、森の中を奥へと進んでいく。
そんな姿を、俺は瞼の内に思い浮かべた。

ああ、この数え方は人間族プレイヤーの感覚だったな。

そんなどうでも良い事を考えながら、少し立ち上がりかけた下草を踏みしめて前進する。

俺達の後ろには、引きずられた材木のおかげで、ペしゃんこに折れた青緑色の草道が再現しているだろう。

プワソンと言えば、バスケットを大事そうに抱えたままだ。

「それも持つよ」

俺が声をかけると、「ありがとうございます」と言って中から鶉の卵大のバッグを取り出す。

翅に当たらぬように器用に斜めがけしたのを見ながら、バスケットは俺の背中の大きい皮袋へ結びつけた。

そうしながらも、俺はゲーム内での種族間闘争を、ぼんやり思い出す。

俺はゴブリンなんだから、今は人間族を一匹と数えるべきかもしれない。

しかし当たり前だが、俺はこの夢に適応するつもりなど無い。

ただでさえ嫌な設定なのに、なんで佐鳥さんのアバターと夫婦なんだよ。

まあ、妖精族はエルフ族と同列の美形アバター種族だから、見て

いる分には飽きないけど。

……それって、ストーカーと同じじゃねえか。
なんか腹立ってきた。ああ、やだやだ。

俺の長い沈黙をどうとったのか、プワソンはふよふよと戻ってきた。

少しばかり表情が暗い。

こちらを見ながら、言いにくそうに尋ねてきた。

「グリズリーさん、なにか怒ってます？」

俺はどう答えようかと少し眉を寄せた。

そんな内心の不満げな感情が敏感に伝わるのか、少女の眉がまた下がる。

その少し憂いの入った表情に、なぜか俺の鼻先が熱くなってしまう。

どうもゴブリンは焦ると鼻に現れるみたいだ。

それよりも今の俺は、妖精の悲しげな表情に耐えられない。

そうだよな、ストーカーと一緒にしちゃ、俺の夢キャラに申し訳ないな。

そう思い直し、朗らかな顔で「否」と伝えるため笑顔を作る。

だがプワソンはいきなり俺から離れ、上昇して近くの樹の枝の陰に隠れた。

俺は理由がわからず見上げて尋ねる。

「どうしたんだ？」

「い、いえ、急に怖い顔になったんで」

妖精は申し訳なさそうに、でも目じりを少し引きつらせて答えてくれた。

なまじ悪人面のゴブリンが大口で笑うと、大層凶悪に見えるらしい。

……なんか、落ち込むなあ。

それでも、誤解で少女を怯えさせる気も無かった俺は、笑顔を引っ込めて説明する。

「怒ってないよ。ちょっと丸太を運ぶのに疲れただけ。大体ゴブリンの俺は、普通にしても機嫌わるそうに見えるからさ」

それを聞いたプワソンは、ゆっくりと針葉樹の葉の間から下降すると、俺の傍に戻ってきた。

肩ぐらいの高さで半泣きの表情のまま、何回も謝ってくる。

「ごめんなさい。グリズリーさんは私の夫かもしれないのに」

はたはたと羽ばたく翅も落ち着きが無く、彼女の内心の動揺をあらわにしていた。

俺は軽く手を振って気にしていないと応えを返す。

「ま、お互いアム熱で記憶が燃えたんだから、しょうがないさ」

ゲーム世界の言い回しを使いながら、苦笑いする。

そういや、アム熱に罹患して記憶を燃やした村長と、元気な妻の「離婚防止」クエストがあったなあ。

オチは、浮気した夫が嘘をついていたという安いやつだったけど。

その事実を妻に告げると妻側が逆に離婚言い出して慰謝料ゲット。報償金はその一部だから少ない。

逆に村長だけにこっそり知らせると、離婚成立後口止め料で報償金がつぱり。

その上村の家宝だった水晶もガメられたしな。

ただし、プレイヤーの性格属性へ黒色微笑的な加点。

どっちにしてもバッドエンドなんで、企画側の悪意さえ感じた。まあ、ベータ時代のヤツだから、本サービス時には消えちゃったけどな。

その後色んなクエストの結果、人間族時代のアバターは、性格属性が真っ黒クロスケになったもんだ。

懐かしい思い出に浸って苦笑を続けていると、頭に柔らかいモノが乗り、両目の間に細い足首から先が垂れ下がった。

俺が瞳だけを上にあげると、なぜか妖精が俺の頭の上に座っていた。

荒いわら束のような俺の髪の毛を、手足で整える感触がする。まるで川岸近くの樹上で巣作りをする、紅ピシユールの様だ。

その小さい鳥型モンスターは、日本のカワセミに似た鳥だ。

違いは羽が赤系なのと巣穴で卵を産まない事か。

「プワソンも疲れた？」

ずっと飛びっぱなしだもんな。

いくら風と花の一族でも休憩したくなるか。

「そんな事はないですけど……」

プワソンは口ごもり、ちょっとだけ躊躇していた。

そして髪を両手で引っ張ると、馬のたずなを操るように、動かす。

「グリズリーさん、右に行ってください」

俺は訳が分からないまま指示に従って右側に寄って行く。

後ろの櫓もそれにつれて、下草の獣道をずれ出した。

妖精は今度は左の髪束を外側に引っ張る。

少し笑いながら俺に命じた。

「行き過ぎました、左に戻ってください」

今度も俺は言うがまま、左へと歩いていく。

ちょうど草道の真ん中へ来た時に、プワソンは踵で俺の眉間を軽くける。

「そのまま真っ直ぐ早足です」

俺は、丸太を引っ張ったまま、少しだけスピードを上げた。

言う通りに動くのが面白いのだろう、頭の上で嬉しそうな笑い声

が聞こえてきた。

そんな彼女に操られる俺も興味深々で、彼女の操り人形になる事を楽しみながら質問した。

「なんで、こんな事してるか教えてもらえるかい？」

「街にいたときから気になってたんですけど、グリズリーさんの頭の上に、私の魔力の跡がはっきり残ってるんですよ。それこそ貼り付けた様に」

「そうなんだ」

「はい。なんでかなーと思ってたんですが、試しに私がやりそうな事はこんな感じかもと」

記憶が無いので、本人にも確信はないって事か。
それでも自分がどんな性格かは分かるもんな。

だけど、と俺は可笑しくなってしまう、「くくく」と声をもらして立ち止まる。

少女は、さっと飛び上がると俺の眼前へと浮揚し、けげんそうだ。
だから俺は、余計我慢できなくてたずねてしまった。

「プワソンさんって意外と子供？」

だって、ロボットですよ。ロボット。

まあ、正直俺は好きだけどね。漢の浪漫だし！
だけど、妖精族の少女だとやっぱり笑える。

からかい気味に俺が突っ込むと、彼女はむくれた顔で反応した。

「な、何いってるんですか、種族の成人の儀は終えてますっ」

そうして後ろを向いた。

対の翅の間に流れる、長い髪の美しいグラデーション。

下に行くほど濃密な紅色になるその艶は、俺の目を釘付けにした。

「子供の妖精族は、毛先の色が薄いですけど、成人は逆に先に行くほど濃くなるんですっ」

「わかった、わかった」

興奮する妖精をなだめようと、俺は彼女の赤と朱の髪をそうっと人差し指でなでる。

すると、彼女はぶるっと震えて背中を丸めてしまった。

俺は、ゆるやかな曲線に合わせて、ゆっくりとさする。

これで落ち着いてくれればいいんだけど。

「あ、あの、背中は」

どこか焦った声で、俺の指から逃れるプワソン。

振り向いた少女は、きれいな顔を髪にも負けぬほど染めていた。

「あー、ごめん。そんなつもりは無かったんだけど」

妖精族同士の求愛行動を思い出し、俺が頭を描きながら謝ると、彼女は首を振った。

「い、いえ、いいんです。その、胸が熱くなりました」

「そ、そう？」

俺もなんだか照れて、熱くなってきた鼻をこする。

「やっぱり、私達は夫婦なんですね。腕輪を見ても、今ひとつ実感が湧きませんでしたけど」

そして嬉しそうに、彼女は肩掛けバッグを閉めた紐を緩める。

「だからこそ、大精霊様は、私達に祝福を下されたのでしょうか」

その中には、毛布の様な起毛の布につつまれた小さな丸いモノ。淡く光るそれは、生命の鼓動と同じ周期で鳴動している。

「私達の赤ちゃんを」

プワソンは愛しそうに卵を抱きしめ、今にも頬ずりしそうな勢いだ。

俺は、ネットカフェでの佐鳥さんの台詞と、俺のアバターで勝手にやった行動が実になった事実を確認した。

夢の中でも怒髪天を衝くというのが、こういう事だと実感できる。

「先輩の子供ができました」

あんの、ストーカアアアアアアアアアアアア。

やまのわるつ

佐鳥さんへの激しい怒りをなんとか無表情に押し込めて、俺は黙々と檜を引き続けている。

眼が覚めたら、正座でトコトン説教しないとなっ

妖精の少女は再び俺の頭に腰を落ち着けたので、俺の苦虫を噛み潰した面に気づかない。

そしてようやく、木々の間に岩肌と小さい建物が垣間見えた。

針葉樹の森の奥で少しだけ空けた土地は、灌木程度しか生えておらず、陽の光が板屋根に降り注ぐ。

建屋の裏手が低い崖になっており、岩の間から水の流れが細い筋を作っていた。

佐鳥さんがここを選んだのは、水場ゆえだと俺にも理解できた。

森であれば食い物もなんとか手に入るしな。

L V 上げせず隠れ住むなら、悪くない選択だろう。

ちなみにこのゲームのキャラクターは腹も減るし、喉も渴く。

インしたまま放置の場合、自動給仕を選んでおけば、携帯する飲食物を勝手に消費してくれる。

だが例えば寝オチして無補給のまま飢餓限界を超えると、死にはしないが筋力や魔力などの基本パラメータ数値がランダムダウンする。

個人的には放置防止のクソ仕様だと思うけど、要するにゲーム企業のアクティブ率向上策なわけだ。

「もちろん損失分のパラメータポイントは復元可能です。但し有料アイテムをご購入下さい」というオチもついている。

この会社は商売がエゲツないほど上手いよな。

「着いたよ」

俺は、少々精神的に疲れ気味で伝えるが、プワソンはすでに母親にでもなったつもりなのか、俺の頭の上で揺られながら、誰にいうともなく声を出して思案している。

「どんな名前が嬉しいのかなあ？」

俺は頭上の独り言に軽いめまいを感じるが、とりあえず落ち着くためにその家に向かって歩く。

「我が家」は要するに掘建て小屋だった。

粗末な作りで、板の幅も不ぞろいな壁。

軒先の長さもツギハギで長短があり、建物全体が微妙に傾いている。

不器用な作り手が急造した、やつつけ仕事の匂いでプンプンだ。なまじ、切り出した木材の質が良いだけに、建築業のバイトもした俺には、もったいなかった。

佐鳥さんは「苦劳しましたよ」と言ってたが、それでこのヒドイ出来か？

呆れた顔でこの家を見ている事に、プワソンは今気づいた様で、調子よく俺を持ち上げる。

「ぐ、グリズリーさんは、大工仕事が上手ですね」

……この失敗作は俺が作った事になるのか。

そうがっくりしつつも、諦念の気持ちになった。

プワソンの小さな手で家は作れないしな。

そもそも妖精族は樹上で眠る。

子育て時に鳥のような巣は作っても、基本野宿が平気な一族だ。

それを言えば、ゴ布林族は洞窟を棲家にするよな、と俺は首をひねった。

打ち捨てられた砦や廃屋を利用する事はある。

でもドワーフの職人レベルはもとより、オーク族の様に稚拙な建築技術すら、持ち合わせていないはずなんだけどな。

俺は鉋もかけられず、荒い地肌の壁板をなでながら考える。

そんなゴ布林に、佐鳥さんが無理やり作らせた結果がこのボロ家。

まあ、道具作成や柵の建築スキルはあるから、それを拡大使用したか？

技術スキルの使用は、失敗することにはんの少しだけ発動確率が上がる。

それでも成功率は馬鹿みたいに低かったはずだ。

再度ログインした時はそこまで頭が回らなかった。技術スキルも確認しなかったし。

家の形にするまでに、一体佐鳥さんは何回トライしたんだろう。

百回？千回？いや、それ以上か？

BOTで自動化すれば、ゲーム会社からアカウント停止食らうはずだしな。

つまり本人がやったとしか思えない訳だけど。

「先輩との愛の巣を建てました」

そう胸を張った、幸せそうな佐鳥さんを思い出す。

そのなりふり構わぬ全力を、もっと違う方向に活用すればいいのに。

「……まあ、確かに労作ではあるかもな」

俺が誰かさんの底知れぬ執念を洩々認めると、妖精少女も嬉しそうに微笑んだ。



小屋の中は六畳部屋程度の広さに、土間と板間があるだけだ。

家具らしいものは箱型の木枠に針葉樹の葉を押し込んだベッドと、無骨なテーブルと丸太を切った椅子。あとは少々の雑器類。

土間には石と泥でつくったかまどが生まれ、煙は開け放った上の窓から外へと流されている。

窓ガラスも無いため、昼でも中途半端なよろい戸を閉めれば暗く、灯りはかまどの火だけとなる。

俺は背負いバッグをベッドに置き、鉈はテーブルの上に、斧は入口付近の壁に立てかける。

プワソンは、部屋の中を見回して、嬉しそうにはしゃいでいる。

「この家のおかげで、鳥型モンスターの心配をしなくていいので助かります」

索敵魔法や回避魔法を覚えていない二人が、敵とエンカウントせず休憩するには、確かに建築物の中にいる方がいい。

特に屋根や壁があれば、妖精族の天敵である鳥型の敵は入ってこないしな。

「そうだな」と俺がいかけた時だ。

外で咆哮を上げる、獣の声が辺りに響き渡る。

俺は窓に飛びつき、叫びの如き声の先を向く。

「スミロドンです」

俺の肩に隠れて外をうかがって妖精が、ひと目見てモンスターの種類を言い当てる。

確かそんな名前だったなと俺も思いましたが、ゲームプレイヤーには別の名前で呼ばれていた。

のっそりとした動きに獰猛さを隠した猫型のモンスター。
白い毛皮に黒い縞。大きな牙が上顎から二本、下顎の脇に伸びている。

大きさは俺よりもかなりデカイ。

剣齒虎。サーベルタイガー。肉食性。レベルは8。

「プワソン、ここに来てから俺達、何回ぐらい精霊の祝福を聞いた？」

突然の質問に彼女は答えに詰まったが、すぐに返事をしてくれた。緋色の眉が、緊張のためにこわばっている。

「五回だったと思います」

やっぱり昨日のログイン時と同じレベル6か。夢なんだから、現実のネットゲと同じじゃなくてもいいだろうに。

俺は雨乞いする仕草で天を仰いで毒づく。

チートの神様はどこに行った。

……あ、俺の夢だから、神は俺か？
役立たずの俺万歳。

「とにかくよろい戸を閉めよう」

俺は羽根板が歪んでいるガラリ戸を閉じて、その隙間から虎の様子を観察した。

モンスターは、十メートルほど離れた地面の低い木を避け用心しながらも、確実に小屋へ接近してくる。

「しばらく、こうやって様子を……」

そう言いかけた俺は、ぐらりと大きなめまいを感じる。

さっきのめまいとは違って、勝手に焦燥感に近い気持ちが湧き出して来た。

「グリズリーさんっ」

膝をついて額を押さえる俺の耳元で、プワソンが俺を呼ぶ。その心配した声を聞きながら、俺は理由もなく悟る。

あと少しすれば、この明晰夢が醒めるのだ。

「プワソン、今のうちに逃げろ。妖精は飛べるから大丈夫だ」

そして間もなく俺も、夢から醒めるしな。

だが、俺の言葉をどう取ったのか、逆に少女は俺にしがみ付いてきた。

「グリズリーさんを一人残してなんて行けません」

「いや、そうじゃなくて」

俺は誤解を解こうとするが、プワソンは必死なのか聞く耳を持ってくれない。

可愛い目尻には涙さえうかべて、覚悟の程を語ってくれる。

「夫婦なんですから、逃げる時は一緒です！」

……人の話聞かない所は、やっぱり佐鳥さんのアバターだよな。

トンチンカンな会話を交わす中で、妙に冷静になりながらも再び

説得しようと話しかける俺。

「えっと、だから」

その瞬間、二人の横のよろい戸が、メリメリという破壊音と共に裂ける。

破片を浴びた俺とプワソンは固まったまま、視線だけをその窓へと向けた。

割れた窓枠の隙間から、サーベルタイガーの貪欲な両眼と、短剣の様な剣歯がのぞく。

「逃げる時間はないみたいだ。空中に上がって」

俺の強く短い言葉に、はっと表情を戻し、彼女は素直にうなずいた。

「わかりました」

俺はそろそろとテーブルまで下がり、扉の側に立てかけてあった伐採用の斧をつかむ。

プワソンは卵の入ったバッグを抱え、なるべく高い位置に避難しようとして天井ギリギリの位置に滞空する。

肉食の猛獣は、刃物の様な爪を持つ太い前足で窓を破壊し、大きな顎門を開き俺達に見せ付けた。

まるで、これから自分の餌になる運命だと知らせるように。

「ターン制ってわけにはいかないよ、な」

斧を両手で構えて、俺がぼやく。

その眼前で窓から部屋に押し入る剣齒虎の動きは、リアルタイム戦闘以外ありえなかった。

こんにちは

サーベルタイガーが窓枠を乗り越え、泥土で固めたかまどの上部に前足を載せる。

大して薪をくべていなかったで、残念ながら虎が熱さのあまり飛び上がるなんて幸運は起こらなかった。

それでも侵入する敵が不安定な体勢だった瞬間が、攻撃のチャンスだったのかもしれない。

だが俺の身体は恐怖のあまり硬直し、斧で打ちかかるどころか、一步も動けない始末。

夢でも、怖いのは一緒だし。

ピンチで目覚める勇者の才能を激しく募集中！

俺の内心にかかわらず、危機的状况は進展していく。部屋にのそりと降り立った俺と剣牙虎は、テーブルを挟んで向かいあう。

「グ、グリズリーさん」

斜め後ろの天井付近から、緊張でかすれた声の妖精が俺を呼ぶ。慌てて肩にかける時間がなく、バッグは持ち手を持ったままだが、俺達の愛の結晶らしい卵は無事中に納まっている。

柔らかい光はぶら下がったバッグの生地から透けるように漏れ出している。

今にも誕生しそうな勢いだ。

種族には人間とエルフの様に交配可能な場合と出来ない場合があ

る。

交配不可の異種族間夫婦が、大精霊に祈念するとまれに願いを聞き届けてくれるのがあの卵だ。

具体的には精霊殿での多額の財産寄進と婚姻誓言による祈りによって魔法卵を得るのだ。

もちろん無理矢理の夫婦関係ではなく、種族を越えた愛が無ければ大精霊に祈りは届かないとされる。

まあ、コウノトリの代わりが大精霊だと思えばいい。

そして互いの身体の一部、例えば髪の毛を卵に巻きつけたり、鱗を貼り付けたりする。そんな儀式を通じて、生まれる子は父母の属性を持つわけだ。

実際のゲーム上はプレイヤー専従NPC扱いだ。ゲーム内貨幣でゲットする場合は、父母のハーフで外見バランスやステータスはラウンドだ。

但し有料アイテムとしてリアルマネーで魔法卵を買う場合は、属性を一つ追加できる。

そして誕生前に設定するってわけさ。

「グリズリーさん、危ないですっ」

俺が卵の反応に気を取られている隙に、タイガーが後ろ足立ち上がり、テーブルへ前足を置くと、上半身を伸ばして襲い掛かる。

反射的に斧を叩きつけるが、短剣並みの牙に食い止められてしまう。

それでも虎の攻撃を押し留める役にはたち、さっき同様、テーブルを挟んだ状態に戻った。

良くみると、斧の刃が滑ったのか、タイガーの牙の付け根部分の上顎が少し切れ、血が滲んでいる。

剣牙虎は、大きな舌で平然と傷口を舐める。大して痛くも無いようだ。

くっそ、ゴブリン弱えええ。

L Vも敵より下だし、魔法も使えないとなると、こりゃ厳しいな。

俺は醜いゴブリンの顔をしかめながら獣を睨む。

一方虎は、プワソンの警告に初めて妖精の存在に気づいた様で、天井見上げて威嚇し始めた。

「ひゃあああ」

獰猛な唸り声の標的になった事に怯え、少女は翅をバタつかせ少しでも上に逃げようと焦る。

肩掛け可能な持ち手部分を両手で握りしめた卵入りのバックも、その動きに合わせて振り子の如くゆれた。

ぶらーん。ぶらーん。

それに目を留めるサーベルタイガー。その視線を受けビビって一層飛び回るプワソン。

ぶらーん。ぶらーん。

つられてさらに気になる揺れ方をする卵入りバッグ。

益々興味を示して前足でおいでおいでを始める剣牙虎。

妖精は攻撃の予備動作と思い込み、小さい翅を使って空中を逃げ

続ける。

いつのまにか、虎は俺の存在を無視。

白い頭を妖精の進路に向け、ひたすら空中に揺れ動く卵に熱中し
だした。

その様子に妙な既視感を刺激され、俺も戦闘中な事を一瞬忘れて
素に戻る。

……まさか、猫じゃらし、か？

しめた！ 虎の注意を引き付けてその隙に倒せば！

「プワソン、いいぞっ。そのままがんばれっ」

俺は回避行動中の少女に大声でアドバイスしながら、勇気づけよ
うと大口で笑いかける。

妖精は、その声にけなげにうなずきつつ俺を見て……そのまま空
中で急停止した。

え？ なんで？

「か、顔」

硬直して真っ青なったプワソンに、俺はゴブリンの笑顔が彼女に
与える影響を思い出した。

その一瞬の空白にサーベルタイガーの攻撃が重なる。

「ああっ」

プワソンの悲鳴と、布が引き裂かれる音。

巨体からは信じられない敏捷性をもつ剣牙虎は、一気にテーブル

の上に跳びのり、そこからさらに俺を飛び越えて少女に襲い掛かったのだ。

素早さでは負けない妖精は敵の前足を避けたが、肩掛け部分に鋭い爪が引っかかり、カバンは千切れて落ちていった。

卵に少しだけ妖精の血が付く。下にいる俺には見えなかったが、全くの無傷とはいかなかったようだ。

俺は落下する魔法の卵を掴もうと手を伸ばしたが、振り向きざまに太い虎の前足で一閃されてしまう。

手の甲をざっくりと削られながらも指を伸ばす。

人指し指と中指の先が届いた。

頼む、届いてくれ！

だが願い空しく、流れた血液が卵の表面を滑らせた。その落下点には白い虎が広げた大きな口。

短い時間なのに、結末までの映像がスローモーションの如く引き伸ばされる。

俺と妖精の魔法卵は、俺の血の飛沫と共に、獣の咥内に消えた。

俺も少女も言葉が出ない。部屋もさっきまでの戦闘が嘘の様な静けさだ。

ただ虎が、蛇の様に喉を鳴らして卵を丸呑みする音だけは聞こえた。

「あ、あ、あかちゃんが」

両手を顔にあて、悲しみに震えるプワソンを見つめる俺は、だが意外に冷静だった。

まあ夢の世界だし。

元々佐鳥さんの悪ふざけに腹立ててたんだから、悪戯の結果としてはこれもアリだよな。

ストーリーカーの嫌がらせを無かった事にしたい深層心理としては妥当なんじゃね。

そう思いながら、気がついたら叫んで剣牙虎に斧を振り降ろしていた。

魔法も知らない、初心者レベルのゴ布林対、牙や爪が武器の素材になる肉食モンスター。

ただひたすら殴るしかないってのに。

何してんだ俺は。冷静なんじゃねーのかよ。

虎の爪が俺のわき腹を抉る。俺は斧をその前足に叩きつける。

虎の牙が俺の二の腕を噛み砕く。俺は重い斧を捨て、無事な片腕で鉈を振るう。

敵の一撃は俺の身体を大きく損傷させるが、俺の一打は顔や手足の表層を切り裂く程度。

獣の顔面も俺と虎自身の血で体毛が赤くなってはいたが、ひるむ様子は欠片もない。

力量差の大きい戦闘が、どれぐらい続いたのか。実際は短い間だったろう。

ついに俺は剣牙虎に組み伏せられて、首を食いちぎられる寸前の状態になった。

鉈で凶暴な牙が自分の喉に刺さらぬよう押し返しながら、俺は夢

の時間切れを待っていた。

やたら痛い明晰夢だけど、覚めさえすれば悪夢で終わるはずだ。

「グリズリーさんを離せっ」

プワソンは懸命に虎の肩あたりを叩くが、残念ながらダメージ無効。敵は煩わしそうにこそするものの、俺から視線をはずしたりはしない。

「早く、逃げろ」

そうしないと、俺が安心して覚醒できねーだろ。

っーか、こんだけやって醒めないのかよっ

必死の言葉も真の意味がすっぱ抜けたままでは、彼女に伝わるはずもない。

俺の危機を救おうと、しゃにむに剣牙虎へ突撃する妖精を見つめていると、場違いだが笑えてきた。

いかんいかん、また彼女が怯えてしまう。

まあ、このモンスターに止めを刺される瞬間に目覚めるのかもしれないな。

俺が少々投げやりになったその時、突如サーベルタイガーの顔が膨れ上がる。

ゴブリンの俺を抑えていた四肢を激しく痙攣させると、横倒しになって苦しみ始める。

グオアア……アアアウウアアア

俺は七転八倒する虎から這いずりながら距離を取り、鉋を構えなおして獣を観察する。

俺の背後に降り立ったプワソンも急展開についていけず、怪訝そうに様子をうかがっている。

ガウウアウウ……グアツ……ゴガアアアアアアア

サーベルタイガーは大きく絶叫すると、顔を床に落とした。

すぐに筋肉のひきつけも停止し、口からだらんと舌を出したまま、動く様子はない。

多分死んだのだろう。

「一体何が……」

言いかけた俺の前で、剣牙虎の死体が赤く光り、内側に向かって縮み出す。その途中から赤い光がどんどん白く変化していった。

眩しさに俺は手をかざし、妖精は豊かな髪を瞼に当てて瞳を守る。

俺は昔見たテレビのサイエンス特番の記憶が甦った。

その中の赤色矮星が縮退のあけく白色矮星になるシミュレーションに似ている。

そのシーンは宇宙の終わりと始まりを感じさせた。

くらんだ目をこすりながら、床の上を確認すると、そこにはコブシ大の宝石が一つ残っていた。

いや、魔法卵だ、それもダイヤモンドの輝きを放つ極上品だった。

「こ、これって私とグリズリーさんの？」

「だろうなあ」

驚きで口を馬鹿みたいに開けた俺とプワソンが言葉少なく会話を交わす。ふと気づくと、俺は痛みを感じていなかった。それどころか重傷だった傷はすべて治癒し跡形もない。少女も同じだった。

ピシリと音が弾け、金剛の玉が砕けていく。

まるで氷の結晶が割れるように剥がれ落ちた内側には、嬰兒が手足を丸めて眠っていた。

プワソンは嬉しさがはちきれそうな表情で、飛んでいくと、わが子をその胸に抱き上げる。

もったも、幼児の大きさは妖精族よりほんの少し小さいぐらい。母娘というより姉妹といった方がイメージが近いだろう。

顔姿は整っており、将来は母親の妖精族に似た美人になりそうだ。髪は中心が濃い翡翠色で先に行くほど色は薄まり、銀色に近くなる。肌は透き通るような白に、若草に寄り添う朝露の煌き。

外見はほぼプワソン、肌と髪で微小に俺って感じだな。

ゴブリンに似なくて良かったなあ。

ハレルヤ！神はダイスを超真面目に振りたもうた！

俺は、胸中でつぶやきながら、気になった部分を再度見つめる。

……そんでもって、あれが追加属性か。

美人さん確定の娘の頭には、猫科の耳がついており、可愛いおしりからは、柔らかい銀毛につつまれた尻尾が生えていたのだ。

俺は自分のネトゲ経験から記憶を探るが、同じようなケースに行き当たらなかった。

魔法卵（有料アイテム）＋母…妖精族（の血）＋父…ゴブリン族（の血）＋追加属性…剣牙虎（の血肉）＝？？？

やっぱりこの組み合わせの専従NPCは見たことが無い。というか、そもそも人気ドン底ゴブリン族と異種族婚するプレイヤーを知らないしな。

過去の廃人の血を刺激され、すこし興奮気味になる。しかしプワソンが幼子の頬をなでる姿にそんな気持ちより、もっと穏やかな感情が俺を満たしていく。

眠っていた子供の瞼がふるえた。ゆっくりと目を開けると、妖精族の少女とゴブリン族のブサメンを見上げ、エメラルドの瞳を一杯に広げてにっこりと笑う。

「まーま。ばーば」

そのキャラメルプリンの様な声音に、プワソンは一撃で撃沈し、自分の頬を擦り付けて大興奮だ。

夢の世界という分だけ、感動が差し引かれた俺だが、正直満更ではないのも事実だった。

俺と二人でひとしきり幼児を撫で回した後、妖精はこちらに向いて宣言する。

「グリズリーさん、この子の名前なんですけど――」

彼女の台詞を聞き終わる前に、全身を焼く尽くすような焦燥感が俺を襲う。

やべえ、今度こそ夢から醒める！

プワソンが俺の指を掴んで何か叫んでいるが、感覚も無く何も聞こえない。

俺は自分の視界が暗闇に覆われていくのを感じながら、結構楽しい夢だったなと独白した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1621r/>

しがつばか。熊原と佐鳥さん2

2011年7月2日01時22分発行